

居場所（安心できる人）の評定と貢献感の関連 Relationship between Ratings of *Ibasho* (The person who eases one's mind) and Sense of Contribution

岡村 季光

Toshimitsu OKAMURA

要旨：本研究の目的は、居場所（安心できる人）の評定と自身の存在が他者のウェル・ビーイングに役に立っている（貢献している）感覚との関連を検討することであった。安心できる程度の評定に男女差がみられたことから、評定を男女別にZ得点に変換後、クラスター分析によって全体高群、全体低群、平均群の3群に分けた。安心できる人の評定による群ごとに、貢献感との関連を検討した結果、全体低群が他の群と比して貢献感得点が低かった。最後に、「貢献感」をめぐる言説について、特に橋本（2015）の考案した貢献感と Adler（1932）の提唱した共同体感覚における貢献感の異同について考察を行った。

キーワード：居場所、安心できる人、貢献感

1. 問題と目的

学校現場における不登校の問題は、特に1990年代における不登校児童生徒（以下、不登校児）の急増から恒常的に注目され続けている。文部科学省（2018）は、平成29年度の不登校児数（1,000人当たりの不登校児数）が小学校35,032名（約5.4名）、中学校108,999名（約32.5名）、合計144,031名（約14.7名）としており、最近5年は増加し続けている状況である。一方、一部の不登校児は学校復帰している事実もあり、不登校児の新規増加数と不登校解消を切り分けて考える必要がある。生徒指導・進路指導研究センター（2018）は、不登校児数を「継続数（前年度も不登校であった児童生徒の数）」と「新規数（前年度は不登校ではなかった児童生徒の数）」とに分けて分析した結果、一部で翌年度に不登校状態が解消している状態が確認でき、特に中学校において不登校状態が解消される数は、学年を追うごとに増えることを明らかにしている。不登校状態が解消された要因は種々考えられるが、不登校児やその保護者を支援する教職員やスクールカウンセラー、各専門機関の専門職が果たした役割が大きいことが推察される。それは、上述の支援者が「居場所づくり」に尽力したものと言えよう。

学校不適応対策調査研究協力者会議は、不登校対策として「心の居場所」という文言を使用し、自己の存在感を実感し精神的に安心していられる場所として学校がその役割を果たすことを求めた（文部省中学校課, 1992）。以降、不登校児を支援する関係者は「居場所づくり」として多様な取り組みを行ってきた（詳細は西中, 2014）。一方、不登校に関する調査研究協力者会議（2003）は、児童生徒にとって魅力ある学校づくりを主体的に目指すことが重要であるとしている。すなわち、学校を「心の居場所」としてだけでなく、教師や友人との心の結び付きや信頼感の中で主体的な学びを進め、共同の活動を通して社会性を身に付ける「絆づくりの場」を目指すとしている。また、生徒指導・進路指導研究センター（2015）は、児童生徒が主体となる「絆づくり」と、教職員主導で行う「居場所

づくり」の違いは、「つくる」の「主語」が、児童生徒なのか、教職員なのか、にあるとしている。つまり、児童生徒が主体的に社会性を育むためのベースづくりが「居場所づくり」であると言えよう。近年は、不登校児への支援に対する基本的な考え方として、「[学校に登校する]という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があること」(不登校に関する調査研究協力者会議, 2016)が挙げられている。すなわち、学校という場所に限らず、「自己の存在感を実感し精神的に安心していられる場所」において、主体的に社会性を育みながら自立を目指していくことが、児童生徒への支援を行う上で重要であると考えられる。

上述の通り、居場所の中で感じる感覚には、自己存在感や安心感が挙げられている。このうち、実証的研究においても安心感は構成要素として頻出しており(杉本・庄司, 2007)、居場所を形成する中核的な役割を果たしていると言えよう(中谷, 2011)。岡村(2015)は、「居場所」を「安心していられる場所」と定義づけた。さらに「居場所」は「時間(安心できる時)」、「空間(安心できる場所)」及び「人間(安心できる人)」という3つの要素により構成され、人との関係を基盤として、そこに時間及び空間の要因が入ると考えた。それ故、「安心できる人」が居場所における重要な要因であり、「安心できる人」の捉え方には個人差があることを示した。

一方、自己の存在感を実感するには、他者の介在が必要であろう。石本(2010)は、一人でいる居場所(個人的居場所)と他者と一緒にいる居場所(社会的居場所)では、「必要とされている」「役に立っている」という自己有用感の間に関連の有無をみいだした。本研究では自己有用感と類似の概念として「貢献感」をとりあげる。橋本(2015)は、「助けてくれた人を助けるべきだ」「助けてくれた人を傷つけてはいけない」という互惠性規範が強調されると、援助するためのポテンシャルをもたない(と認識している)ままに(借りを返すあてが持てないままに)援助を要請することをためらって遠慮する、すなわち援助抑制が働くのではないかという仮説に基づき、自身が他者にどのくらい貢献できるのかを指標とするアプローチとして貢献感の概念を提唱した。橋本(2015)は、貢献感を「他者のウェル・ビーイングのために、自身の存在が貢献している(役に立っている)と感じる程度」と定義している。上述の貢献感の定義は、自己存在感を実感することにもつながることが考えられる。また、援助要請とは相手に頼ることとも考えられ、自身や他者への安心感との関連において差異が生じることが予想できる。

そこで、本研究では、「安心できる人」の評定と自身の存在が他者のウェル・ビーイングに役に立っている(貢献している)感覚との関連を検討することを目的とする。

2. 方法

2.1 調査対象者

近畿圏内在住の大学生168名(男子95名、女子72名、不明1名)。平均年齢は19.35歳(SD 1.40, 範囲18~30歳)であった。

2.2 調査内容

2.2.1 「居場所」(安心できる人) ごとの安心できる程度の評定 “あなたは以下の人と居る時に安心できますか。ここで用いている「安心できる」とは、ホッとする、落ち着く等という意味です。”という指示を行い、“自分ひとり”“父親”“母親”“きょうだい”“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”“恋人”という場面を設定した。そして、各場面において安心できる程度を調べるために“5:とても安心できる”から“1:あまり安心できない”の5件法尺度を設定した。

2.2.2 貢献感尺度 自身の存在が他者のウェル・ビーイングのために役に立っている(貢献している)感覚

を測定することを目的とした尺度で、橋本（2015）が開発した。“私がいる方が、場の雰囲気が良くなると思う。”などの項目で構成された単一因子構造であり、逆転項目1項目（私はみんなにとって、いてもいなくてもいい存在だと思う。）を含む14項目からなっていた。各項目について“7：強くそう思う”から“1：まったくそう思わない”の7件法尺度を設定した。

2.3 調査手続

著者が担当する授業終了後に上述の調査用紙を配付し、以下に示す調査を集团的に実施した。

2.3.1 「居場所」（安心できる人）ごとの安心できる程度の評定 2.2.1に記述した調査項目について、“自分ひとり”“父親”“母親”“きょうだい”“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”“恋人”という場面において、それぞれ“5：とても安心できる”から“1：あまり安心できない”の5件法で回答を求めた。

2.3.2 貢献感尺度の評定 2.2.2に記述した調査項目について、“7：強くそう思う”から“1：まったくそう思わない”の7件法で回答を求めた。

2.3.3 倫理的配慮 調査手続においては倫理的配慮を行った。具体的には、調査用紙冒頭に当該調査の内容に関しては授業とは関係ないこと、結果の処理は全て統計的に処理され個人を特定する形で公表しないこと、調査への回答は自由意志であり調査に拒否しても個人の不利益になることは決してない旨を明記し、調査実施前にも口頭で上述の説明を行った。

3. 結果と考察

3.1 安心できる人評定による分類 性別不明だった1名を除き、各場面における「安心できる人」評定得点で男女別に集計した。結果を表1に示す。男女別に t 検定を行った結果、“母親” ($t(166)=2.21, p<.05, d=.34$) 及び“恋人” ($t(166)=2.40, p<.05, d=.37$) において有意な差をみだし、“母親”は女子の方が男子よりも得点が高く、“恋人”は男子の方が女子よりも得点が高かった。本研究の結果は、岡村（2018）と同等であり、肯定できるものと言えよう。

表1 男女別各場面における「安心できる人」評定得点

| 場面 | 男子 $n=95$ | | 女子 $n=72$ | | 合計 $N=167$ | |
|---------|--------------|--------|--------------|--------|---------------|--------|
| | M | (SD) | M | (SD) | M | (SD) |
| 自分 | 3.67 | (1.10) | 3.47 | (1.05) | 3.58 | (1.08) |
| 父親 | 3.20 | (1.29) | 3.50 | (1.16) | 3.33 | (1.24) |
| 母親 | 3.65 | (1.07) | < 4.00 | (.98) | 3.80 | (1.04) |
| きょうだい | 3.33 | (1.16) | 3.50 | (1.06) | 3.40 | (1.12) |
| 現学校以前友人 | 4.15 | (1.05) | 3.86 | (1.12) | 4.02 | (1.08) |
| 現学校以降友人 | 3.75 | (.97) | 3.64 | (.94) | 3.70 | (.96) |
| 恋人 | 4.15 | (1.01) | > 3.76 | (1.04) | 3.98 | (1.04) |

3.2 安心できる人評定による分類 先述の通り、各場面における「安心できる人」評定は男女差がみられた。そこで、各場面における「安心できる人」評定得点を男女別にZ得点に変換後、クラスター分析を行った。結果を図1に示す。安心できる人の評定が全体的に高かった群を“全体高群”(30名)、全体的に低かった群を“全体低群”(69名)、ほぼ平均的な群を“平均群”(69名)と命名し分類を行った。平均群は他の場面と比較して自分ひとりの場面のみ評定が低く、全体低群は他の場面と比較して自分ひとりの場面のみ評定が高いのが特徴であった。

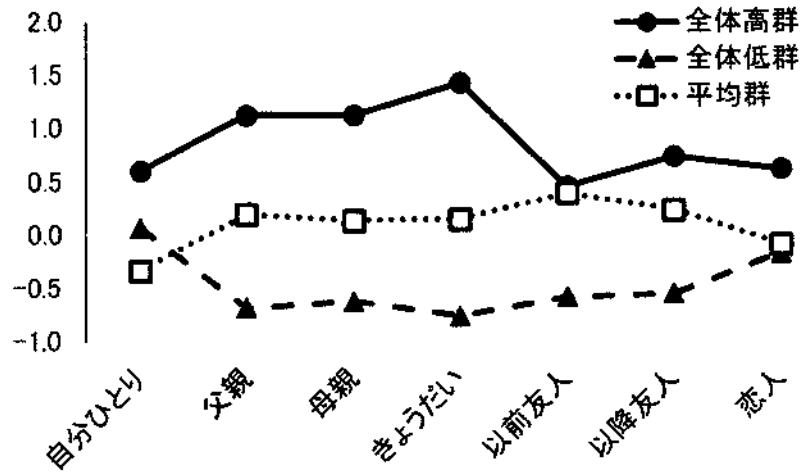


図1 安心できる人評定の分類

3.3 安心できる人の評定と貢献感の関連 貢献感尺度得点の信頼性を検討するため、 α 係数を算出した結果、 $\alpha = .95$ と十分な信頼性が確認された。そこで、貢献感尺度14項目をすべて採用し、安心できる人評定群ごとに貢献感尺度得点の平均を算出した。結果を図2に示す。一要因分散分析を行った結果、群間に有意な差がみられ ($F(2,165) = 4.79, p < .01, \eta^2 = .06$)、全体低群が他の群と比して得点が低かった。これまでに居場所感には自己存在感 (文部省中学校課, 1992)、自己有用感 (石本, 2010) が要因として挙げられていたが、本研究結果は自他への安心感の高さと、他者に貢献している感覚が関連していることが明らかとなった。橋本 (2015) は、貢献感と家族及び友人への援助要請意図に正の関連がみられ、貢献感が低い時には、互惠性規範が、特に家族における援助要請の抑制要因として機能しうると指摘している。本研究における「安心できる人」分類において、特に家族に関するクラスター得点差は他と比して顕著にみられることから、家族に対する安心できる感覚の差が貢献感の得点差に影響したのかもしれない。

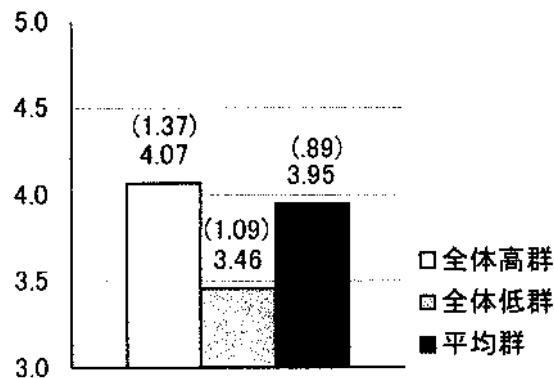


図2 安心できる人評定と貢献感の関連
(カッコ内数値は標準偏差)

3.4 おわりに 本研究の目的は、居場所（安心できる人）の評定と自身の存在が他者のウェル・ビーイングに役に立っている（貢献している）感覚との関連を検討することであった。安心できる程度の評定に男女差がみられたことから、評定を男女別にZ得点に変換後、クラスター分析によって全体高群、全体低群、平均群の3群に分けた。安心できる人の評定による群ごとに、貢献感との関連を検討した結果、全体低群が他の群と比して貢献感得点が低かった。

本項では貢献感をめぐる言説について考察を行う。本研究では、橋本（2015）の互惠性規範と援助要請の関連を検討する目的で作成された貢献感尺度を用いたが、貢献感についてはAdler（1932）もまた言及している。Adler（1932）は、「人は、弱さ、欠点、限界のために、いつも他者と結びついているのである。自分自身の幸福と人類の幸福のためにもっとも貢献するのは共同体感覚である」としている。野田（1989）は、共同体感覚の定義は困難であると述べた上で、これまでの共同体感覚の議論をまとめ、共同体感覚は「私は共同体の一員だ」という感覚である「所属感」、「共同体は私のために役に立ってくれるんだという感覚」である「信頼感」、「私は共同体のために役立つことができる」という感覚である「貢献感」という3側面で構成されると述べている。すなわち、共同体感覚の1要因として貢献感が挙げられている。

それでは、橋本（2015）の貢献感とAdler（1932）のそれは同一の概念なのだろうか。実証的研究において比較すると、橋本（2015）は、貢献感尺度の作成において、ビッグ・ファイブの外向性と協調性、一般的信頼といった対人関係へのポジティブな態度にまつわる尺度との関連を検討した。その結果、いずれも中程度の正の相関であった。その他、社会的スキル、人生満足感、自尊感情とも中程度から高い正の相関であった。一方、高坂（2011）は、Adlerの中心的理論概念である共同体感覚を測定するための尺度として共同体感覚尺度を作成している。項目を因子分析により検討した結果、「所属感・信頼感」、「自己受容」、「貢献感」の3因子が抽出された。さらに、下位尺度の「貢献感」に着目すると、学校適応において中程度の正の相関、大学生生活不安において、大学生女子に弱い負の相関、心理的ストレス反応及び劣等感において、一部を除き中程度から弱い負の相関であった。特に劣等感においては、「友達づくりの下手さ」において、中程度の負の相関がみられた。以上の結果から、特に対人関係に関する概念とは両者とも関連が確認されており、共通性がみいだせる。

しかし、両者は異なる点もみられる。第1に、橋本（2015）の貢献感とは、現実の身近な対人関係を想定しているのに対し、Adlerの共同体感覚は、「さしあたって自分が所属する家族、学校、職場、社会、国家、人類というすべてであり、過去、現在、未来のすべての人類、さらには生きているものも、生きていないものも含めた、この宇宙全体をさしている」（Adler, 1927）としており、決して既存の社会ではなく、「理想としての共同体感覚」（岸見, 2014）を想定していると言えよう。第2に、橋本（2015）の貢献感とAdler（1932）のそれは、相手に対する期待感の有無という相違が考えられる。これは、上述と同様、現実の対人関係を想定しているか否かという違いに起因するものと考えられる。

共同体感覚は、従前指摘されてきた居場所の感覚と関連が多い。今後は、共同体感覚の概念も視野に入れ、検討を行っていくことが必要であろう。

引用文献

- Adler, A. (1927). *Menschenkenntnis*. Leipzig: S. Hirzel. (岸見 一郎 (訳) (2008). 人間知の心理学 アルテ)
- Adler, A. (1932). *What Life Could Mean to You*. London: George Allen and Unwin. (岸見 一郎 (訳) (2010). 人生の意味の心理学 アルテ)

- 不登校問題に関する調査研究協力者会議 (2003). 今後の不登校への対応の在り方について (報告) <http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1283839/www.mext.go.jp/b_menu/public/2003/03041134.htm> (2019年7月19日閲覧)
- 不登校問題に関する調査研究協力者会議 (2016). 不登校児童生徒への支援に関する最終報告～一人一人の多様な課題に対応した切れ目のない組織的な支援の推進～ <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/108/houkoku/1374848.htm> (2019年7月19日閲覧)
- 橋本 剛 (2015). 大学生における援助要請傾向と貢献感の関連－貢献感尺度の作成を含めて－ 人文論集, 65(2), 61-78.
- 石本 雄真 (2010). こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所－精神的健康および本来感, 自己有用感との関連から－ カウンセリング研究, 43(1), 72-78.
- 岸見 一郎 (2014). 改訂新版 アドラーを読む：共同体感覚の諸相 アルテ
- 文部科学省 (2018). 平成29年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果 <http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2019/01/10/1412082-2902.pdf> (2019年7月19日閲覧)
- 文部省中学校課 (1992). 「登校拒否 (不登校) 問題について－児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して－ (学校不適応対策調査研究協力者会議報告)」教育委員会月報, 44, 25-29.
- 中谷 陽輔 (2011). 居場所を感じる自己 榎本 博明 (編著) 自己心理学の最先端：自己の構造と機能を科学する あいり出版 (pp.141-151).
- 西中 華子 (2014). 居場所づくりの現状と課題 神戸大学発達・臨床心理学研究, 13, 7-20.
- 野田 俊作 (1989). アドラー心理学トーキングセミナー 性格はいつでも変えられる アニマ2001
- 岡村 季光 (2015). 一人ひとりの「居場所」をどうつくるか 梶田 叡一 (責任編集)・人間教育研究協議会 (編) 実践的思考力・課題解決力を鍛える：PISA型学力をどう育てるか (教育フォーラム55) 金子書房 (pp.111-121).
- 岡村 秀光 (2018). 「居場所」(安心できる人)を規定する媒介要因の検討－“自分ひとり”ですごす居場所に注目して－ 奈良学園大学研究紀要, 8, 191-197.
- 生徒指導・進路指導研究センター (2015). 生徒指導リーフ Leaf.2 「絆づくり」と「居場所づくり」 <<https://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf02.pdf>> (2019年7月19日閲覧)
- 生徒指導・進路指導研究センター (2018). 生徒指導リーフ Leaf.22 不登校の数を「継続数」と「新規数」とで考える <<https://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf22.pdf>> (2019年7月19日閲覧)
- 杉本 希映・庄司 一子 (2007). 子どもの『居場所』研究の動向と課題 カウンセリング研究, 40(1), 81-91.